

# 「親鸞と現代 第Ⅰ期」 第七回

同朋大学特任教授 廣 瀬 惺

## はじめに

お寒い中、ご遠方からもお越しいただき、ありがとうございます。最後のトリだということで、一ヶ月ほど前から相当プレッシャーを与えられ続けてきました。

今回は私のお話は少し早めに終わらせていただいて、約一〇分ほど琵琶の演奏を聴いていただきます。この山内光司さんという方は、二年前に同朋大学の別科をご卒業なさって、琵琶で仏法の語りをなさっておられる方です。今日は最後ということもあって、演奏をしていただきます。

それで今日のタイトルですが、「大震災を縁に学んでいること」と自分なりに付けました。大震災のチャリティー講座ということで、こういうテーマにしたわけです。これは私だけではなくて、お集まりくださったみなさまも当然そうだと思いますが、昨年三月一日以降、どこかに震災と原発の問題を念頭に置きながら、これまで生活を

してきたということがございます。その中で、タイトルを「学んでいること」という進行形にしました。「学んだこと」と、どっちにしようかなと思ったんですが、現実というのは次々と展開していくので、結論を出すことができないわけです。その中からいろんな学びをしていく以外はないということが、私自身の現実との関わりということもありまして、進行形で出させていただきました。

これまでも、いろんなご縁の中で、私なりにぼつりぼつりと、その時点その時点で、震災の中でどう自分は親鸞を学んでいくのか、念仏を学んでいくのか、ということについてお話をさせていただいてまいりました。今回はその総集編というわけではありませんが、そういう中でお話ししてまいりましたものを、私なりに整理する形でお話をさせていただければと思っております。

## (一)

三月一日、最初の地震については知りませんでした。車に乗って運転をしていたので、全然気づかずに家に帰りました。すると家の者が、テレビをじーと見ているわけです。どうも見たことがない光景なものですから、「どうしたんや」と言いましたら、「気づかんかったのか」と。車に乗っていてわからなかったんです。その次の第二震は感じました。その時は、どれほど大きな震災なのかということがまったくわからなかったのですが、ただその時のショックは、小学生が津波に流されたということでした。私の目と耳に入ってまいりまして、「小学生が流さ

れたというのは残酷なことだ」と、その時はそれだけだったので。それからテレビをずっと見ておりましたら、想像を絶する大災害で、「これは大変だ」と。

と同時に、非常に私的なことで恐縮なんです。三月一四日にある所での公開講座が組まれておりまして、そこで『歎異抄』の第九章についてお話をさせていただくことになっていたわけです。はじめは「いや、こういう中で話さないかん」と頑張ったんです。ところが、話せるものではないわけです。まず自分自身の整理がつかない。それで、「中止してくれんかな」と思っていましたら、主催者の方から電話がかかってきて、「中止の電話かな」と思いましたら、「幸いにしてここは被害がなかった。だから行うから来てくれ」と。うわあと思いました。災害が起こる前に準備した『歎異抄』の話はまったく出来ないということがあります。公開講座ですから、もう案内もされていますし、どんな方が来ておられるかもわかりません。

しかし、そういう中で一時間半という時間を話さなければならぬ。私は相当に不器用でして、状況に非常に振り回される人間なんです。ですから本当に一瞬の状況の変化で、こちらは動揺してくるんですね。「もうこれはダメだ」と。『歎異抄』第九章を何とか貫くか」とも思ったんですが、近づけば近づくほど、自分の中で言葉になっていけません。「まあダメだな」と思って、それでその中で気づいたこと、震災を通して気づいたことをメモして行ったわけです。そうしたら案の定、一時間半、何とか時間だけの役目を果たしたという程度のお話となってしまうました。

終わった後の懇親会の辛いこと。その中に同朋の卒業生もいたので慰めてくれるんですが、慰めが慰めにならない

いんですね。こちらは落ち込んでいる。そんなことが一四日にありました。たまたま宿泊することになっていたので、ホテルに帰ってずっといろいろ考えておりました。翌日、迎えに来てくれたのも同朋の卒業生なんです。が、「昨日はご苦労様でした」と言われて、「いいえ、本当に十分なことが出来なくて。その中で気になってきたことがあるんだ」ということで、震災を通して、自分の考えていることを話したのは、その卒業生との会話が初めてでした。

そういう中でも親鸞聖人、それから法然上人に学んでいるというのが自分の立場であると。一つの立つところがあるわけです。問題が明らかになるか、ならないかは別にして、これはやはり幸せなことだと思っんです。もう大変な状況ではあるんですが、しかしそういう中でも、そこから自分なりの一つの方向を開いていけるものが与えられているんだなど。当時はそんな余裕もなくて今から思えばですが。

それは私だけではなくて、私の友達で食道がんになっているのがいるんですが、彼もがんの宣告をされた時にそういうことを言っていました。「ショックだった。しかし一つの方向だけは自分にあるから、そこに立って念仏の教えを自分のはっきりしていきたいんだ」と。「だから『大無量寿経』をもう一度読みたい」と言っていて、「入院する時に持って行くからな」と言ってくれて、持って行く『大経』の写真をメールで送ってくれました。立つところはあるけれども、それは答えではない。しかし最低限、混乱した時に何か一つの方向を見出し、こうとすることができるといふことです。

(11)

それで、卒業生とタクシーの中で話していたことに関して、思い出されることがあります。それは、法然上人が比叡山を下りられて、京都の町中で、その当時は階層社会ですから、社会的な地位が上の人、下の人、いろんな方々に何と話され続けたのだろうかということでした。親鸞聖人の奥様である恵信尼公が、親鸞聖人が亡くなられた直後に、末娘の覚信尼公に出されたお手紙に、「生死いずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いし」と伝えています。ただ一筋に私どもが迷いを出る道、私どもが依って生きる道、「まこと」と言ってよろしいでしょう。それをただ一筋に、法然上人はお説きになっておられたと、恵信尼様はお手紙に書いておられます。「ただ一筋に」と。この言葉には、以前から一つの確かさを感じておりました。しかし私自身は、「ただ一筋に」と書かれているような形で一四日にはお話ができなかったわけです。

そして家に帰りまして、法然上人がお話になっておられた状況は一体どういう状況だったんだろうかということ、さっそく年表などを通して私なりに調べてみました。法然上人はどういう状況の中で、ただ一筋に「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」とお説きになり続けていたのか。これは平安末期、十七年後に鎌倉幕府に変わるという時に、法然上人は京都の町中で念仏の教え一つを説き続けていかれたわけです。どういう状況かといえば、それは源平の争い、公家社会から武家社会に変わる大きな転換期です。そういう状況の中で、「ただ一筋に」と恵

信尼様が記しておられる通り説かれるわけです。そしてさらに調べてみますと、法然上人が吉水に道場を開かれ、二年後に京都では大火が起こっていました、二万軒が消失しております。そういう状況下の京都の町中で、ただ一筋にお説きになさっているわけです。正確にはわかりませんが、その当時の京都の人口が十万弱だろうと出てまいりますので、亡くなられた数は相当な人数です。相当な状況です。そういう状況のもとで京都の東山に身を置いておられるわけですが、そこで「ただ一筋に」なんです。さらに見ますと、養和の飢饉が西日本を襲いました。平安末期の大変な飢饉です。これは『方丈記』に書かれております有名な飢饉でございます。京都だけで四二三〇〇人が亡くなったという記録が残っております。これは法然上人が道場を開かれた六年後でございます。

ですから二年後に二万軒の火災が起こり、六年後に養和の飢饉で四二三〇〇人の方が亡くなっていかれる。そして、いま一つ申しますなら吉水教団、念仏教団が弾圧されようとする直前、もう弾圧が始まっていると言ってもよいらしいわけですが、そのような中でも「ただ一筋に」というのは、普通考えられないと思うんですね。独り言で言うのならよろしいですよ、ただ念仏だと。しかし、そういう状況の中で生きておられる方々が、法然上人のところへ足を運ばれて、そして「ただ念仏して」ということをお聞きになられて、また立ち上がって、現場へと帰っていかれるわけでしょう。それはちょっと考えられないんじゃないかと思えます。

そういう意味では、法然上人の評価があまりにも低すぎるのではないかと思えます。別に評価されようと思ってみえませんかですが、むしろ評価が低いということは、こちらが罰を被っているということがあるのではないですかね。人生が明らかになっていかないという罰です。私の友達は、震災の直後ですが、法然上人のことを「巨人」

という表現をしました。「巨人法然」と。「ああ、そうだろうな」と思いました。様々な状況の中で、ただ一筋に「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」とおっしゃり続けられた。そしてその言葉が、人々を生かす言葉として作用していった。そのように作用していく形で表現することが出来たというのは、まさに「巨人」です。

私は、友人と同じ頃に「宗教的人格法然」と表現いたしました。宗教的人格だと思っんですね。私も、いろんなことに動揺し、何に依って生きれば良いのか分からない時、その中に一言、言葉を投げかけてくれる。そして、それにおいて生きていけば良いんだという自信を、私たちの上に回復していつてくれる存在。私はこの「一筋に」ということを通して、「宗教的人格法然」ということを自分自身の中に刻み込まれたということがございます。

「ただ一筋に」という言葉を、私の友人は「巨人」という表現を採りました。たしかに「巨人」と言えますが、私自身は「宗教的人格法然」です。「宗教的」ということは、人々に対して「これに依って」ということを、本当に生きることが出来る形で伝えることのできる人です。単なる言葉だけではない。そういう意味で、蓮如上人もそういう方だったんではないかなと思います。ただ組織運動で宗教教団が広がるということでないと思います。「これに依って」ということが、与えられた喜びが、いろんな縁を通して、大きな組織になっていくわけでしょう。法然、それから蓮如も、そういう中の一人に入るのではないのでしょうか。宗教的人格としての法然ということが言えるのではないかと思うわけです。それが震災を通して、自分の上に一つのイメージとして明瞭になってきた事柄でございます。

それ以降、法然上人の語録を紐解いたりしているわけです。法然上人の語録というのは、改めて読み返させてい

ただくと本当に良いですね。良いですねというのもおかしいですが、無理がないんです。生活の中で働いていく言葉だなど。法然上人の言葉というのは、生活と落差がないんです。生活の中に表現されて、生活の中に光を生み、生活の中に和やかさを開いていくような感じがします。これは、法然上人の語録が持っている性格だと思います。ある意味では当たり前のことをおっしゃっているわけです。表現に本当に無理がないんです。日常の中に光る言葉というか、その言葉が、日常で行き詰まっている我々の心を開いてくれるんです。法然上人は、そういう表現を採ることのできた方、やはり宗教的人格です。法然上人の元へ来られる方々というのは、別に学問をしておられる方々ではありません。いろんな人が来られるわけです。そういう中で念仏を表現していかれたということで、宗教的人格ということができると思うわけです。

## (三)

しかし、それが親鸞聖人になると難しくなる。親鸞聖人という方は、自分自身を徹底して問い詰めていかれた方だと思えます。それは、法然という方がおられたから出来たんだろうと思えます。目印なくして問い詰めるということは、ちょっとできないですよ。法然という方がおられて、法然上人からお聞きになられた念仏の教えを、安心して迷いながら、七転八倒しながら徹底していかれた。どう生きていけば良いのかという答えは、もう法然上人が出されているわけでしょう。それをどう生きていけば良いのかということ、生涯の歩みをもって示してください。



の方が親鸞であると申し上げてよろしいのではないのでしょうか。そういう意味では、法然上人の語録を通して、また親鸞聖人のご生涯に学ぶことを通して、法然上人、そして親鸞聖人はそういう希有な宗教者ではないかな、という感じしております。

出家ではなくて私たちと同じ生き方をされる中で、念仏の教えを生き抜いてくださったという意味で、生涯そのものが教えという意味を持っている方が親鸞であると、申し上げてよろしいんではないのでしょうか。そういう意味で、親鸞聖人が生きていかれた道筋を、親鸞聖人ご自身が表現してくださるものとして、お手紙が残されています。お手紙の多くは、八十歳以降の関東の教団の混乱の中でお出しになられたものです。ですから、親鸞聖人が出されているお手紙の背景には、関東教団の混乱、そして善鸞義絶があるわけです。そういう問題を抱えておられる中で書いていかれた。お手紙というのは、状況を背景にしています。研究室で書くものではなくして、生活の中で、ちやぶ台の上で書くものから、状況を背景にして書いておられる。そして、お手紙としてよく知られているものが、蓮如上人の『御文』でしょうね。ある方は、一向一揆、戦国時代を背景にして読まない、本当の『御文』はわからないという言い方をされています。やはりお手紙の背景に状況がありますから、何年何月何日という日にちが意味を持つてくるのではないかと思うわけです。それで今、法然上人につきましては「ただ一筋に」ということを、恵信尼様のお手紙から学ばせていただいたわけです。

それに対して、親鸞聖人には『末燈鈔』がございます。この名前がまたよろしいですね。「末法の世の燈」で『末燈鈔』と。非常にいいお名前です。親鸞聖人のお手紙はいろんな形で編纂されていますが、その一つが『末燈

鈔』です。それは、親鸞聖人のお手紙を燈としてただかれた方が編纂なさったと言ってもいいわけでしょう。さらに、その親鸞聖人のお手紙を燈として生きていかれた方々が、たくさんいらっしやるわけでしょう。その一通でございます。親鸞聖人八十八歳の時のお手紙がございます。亡くなる二年前です。その冒頭を拝読させていただきます。

「なによりも、ごぞごとし、老少男女おおくのひとびとのしにあいて候うらんことこそ、あわれにそうらえ。ただし、生死無常のことわり、くわしく如来のときおかせおわしましてそうろうえは、おどろきおぼしめすべからずそうろう。まず、善信が身には、臨終の善悪をばもうさず、信心決定のひとは、うたがいなければ、正定聚に住することにて候うなり。さればこそ」云々というお手紙です。

去年、今年と、老少を問わず多くの男女が亡くなっていかれた。それは非常に悲しいことだと、まずこうおっしゃっておられます。ところがそれに続いて、生死無常の道理は、詳しく如来が説きおいてくださるわけですから、驚いてはなりません。そしてその後、信心をはっきりしなさいと、信心の問題に展開なさっておられるわけです。

このお手紙につきましては私自身、ずっと長い間、引っかかっておりました。一般的な感情からいえば、冷たいじゃないかと。親鸞聖人は、関東の方々からたくさんの手紙をいただいておりますが、この時は大変な地震や飢饉なんです。全国でたくさんの方が亡くなっていかれた。これを正嘉の飢饉といいます。当然、飢饉が起これば疫病が流行る。さまざまの状況だったんでしょう。そういう状況の中で、関東の同朋の方々から、京都の親鸞聖人のところへお手紙が送られた。それに対する親鸞聖人のお返事が、今読みましたお手紙なんです。悲しいことで

ある。ただし、仏様が生死無常の道理をお説きになっておられるから、けっして驚いてはならないと。信心をとくに明らかにしようではないかと。そういう展開になっています。これはわからないですね。

それに対しまして、この同じ飢饉について筆を起しておられるのが、日蓮上人の『立正安国論』なんです。それを読ませていただきますと、親鸞聖人のお手紙と違って全国的な状況を書いておられます。「旅客来りて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、天変・地変、飢饉・疫癘、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充ちてり。死を招くの輩、すでに大半を超え、これを悲しまざるの族、あえて一人もなし」と。大半の人々が亡くなっていったというわけです。親鸞聖人のお手紙と同じ状況を背景として書いておられる。その後、日蓮上人はどう展開していかれるかと言いますと、「なぜそういう状況が生まれるのかと言えは、それは法然の念仏が広がっておるからだ」と。だから『法華経』をもって国教とすることによって、何とか安らかな国家を建設しているのではないかと。そういう論調になっていくわけです。そうしますと、これはわかりやすい。そういう悲惨な状況の原因は念仏にあるんだと。こう押さえて、そして何とかその状況を正していくために、『法華経』を国教とすることによって、状況を改善していこうではないかということをおっしゃっている。こちらはよくわかります。

#### (四)

ところが、親鸞聖人の場合は「驚くな」と言う。「悲しいことだ」とおっしゃっていますが、生死無常の理を仏

様が詳しく説いておられるわけだから、驚いてはならないと。信心を明確にすることが大事なんだと。こういう展開はなかなか受け付けられないですね。この言葉は以前から気にはなっていました。が、なかなかスッと入ってこないお手紙であったわけです。わかるけれども受けとることが出来ない。そういうお手紙です。しかし今回の大震災が、考えることを要請したと思うんですね。親鸞聖人は八十八歳ですから、親鸞聖人からすれば老骨にむち打って書いておられるわけでしょう。後から山内さんが「如来大悲の恩徳」を演奏してくださいますが、まさに恩徳を感じざるを得ないような、八十八歳の親鸞聖人のお手紙でございます。これをどういただければ良いか。

そうしますと、これはある意味、当然といっても良いのですが、ある方がこのようにおっしゃっています。「親鸞聖人の思想は非常に厳しい」。それから「親鸞の宗教思想を、人間を根本から救う思想としたのは、親鸞聖人が度重なる飢饉を経験しておられるからだ」と。この八十八歳の時のお手紙は、越後や関東での生活が背景になっているだろうと思います。また逆に言えば、背景になっているからこそ、京都にいた親鸞聖人が、遠く離れた関東の方々にこういう手紙をお出しになられて、心を通ずることが出来たんだろうと思います。親鸞聖人の関東での生活が背景になっていないと、それこそ「何を言っとるんだ」「親鸞さんはこの厳しさを知らないから言っているんじゃないか」と、そういう話になってしまいますよね。

そうしますと、先ほど正嘉の飢饉と言いましたが、親鸞聖人は鎌倉時代の代表的な飢饉を二度も経験しておられるわけです。最後はこの八十八歳です。もう一つが、親鸞聖人五十九歳の時の「寛喜の飢饉」です。この二つが鎌倉時代の大きな飢饉なんですが、どちらも経験なさっています。もう一つ挙げますと、親鸞聖人四十二歳の時の飢

鐘です。この時は名称はありませんが、建保二（一一二四）年です。親鸞聖人のお手紙や奥様のお手紙等で残されていますのは、この三つです。その中でも寛喜の飢鐘は非常にすさまじく、全国で当時の三分の一の方が亡くなっていたと言われています。

これはいろんな形でお聞きになっていると思いますが、この建保と寛喜の二つの飢鐘を、親鸞聖人の三部経千部読誦の出来事として、奥様がお手紙に書いておられるわけです。親鸞聖人が四十二歳の時、三部経千部読誦をなさるわけです。そうして四日目ぐらいにやめられる。これは私たちからすれば何でもありませんが、親鸞聖人は法然上人から「ただ念仏」と聞いているわけです。「他のものに救いはない。ただ念仏に救われていくんだ」と。その親鸞聖人が三部経千部読誦をなさるといふのは、大変なことですよ。よほど行き詰まっておられないと出来ないです。そして千部といったら相当な量です。三部経を千回ですね。どんなものでしょうか。私はまず声がなくなります。それを四日間、ずっとなさるわけです。この時は、規模としてはそんなに大きくはなかったと思いますが、それでもたくさんの方々の方が亡くなっていかれた。そういう状況の中で、ひょっとしたら国から求められて、親鸞聖人がなされたのかもわかりません。しかし、国家から求められたとしてもやるような親鸞聖人ではないですから、親鸞聖人にも、それに賛同せざるを得ないような内心があったのでしょうか。

深刻なのは五十九歳の時です。その時の様子の冒頭だけ拝読させていただきたいと思えます。善信とありますが親鸞のことです。「善信の御房、寛喜三年四月十四日午の時ばかりより、風邪心地すこしおぼえて、その夕さりより臥して、大事におわしますに、腰・膝をも打たせず、天性、看病人をも寄せず」。ここには親鸞聖人の頑固な性

格が出ていると思います。病気になっても看病人を寄せつけない。僕ならすぐ来てほしいと思います。親鸞という方は、病気になってうなされていても、人を寄せつけなかった。「ただ音もせずして臥しておわしませば、御身をさぐれば、あたたかなる事火のごとし。頭のうたせ給う事もなのめならず」と。熱を出して、頭が痛くて、布団を被って寝ておられるわけです。そして誰も近くに寄せない。異様な光景ではないでしょうか。そしてこの次には、これが単なる肉体の病気ではないことが出てきます。

「さて、臥して四日と申すあか月、苦しきに、『今はさてあらん』と仰せらる」と。「そういうことであつたのか」と、こうおっしゃった。そうしましたら、ダートと汗が出て熱が引いていった、ということがその後書いてあります。今は時間の関係で読みませんが、これは単なる肉体の病気ではないですね。もうどうにも身動きが取れなくなって、布団に伏して立ち上がれないわけです。布団にジーツと入っておられたわけでしょう。そして、うなされている中に『大無量寿経』の文字が、一字も残らず出てきたというんです。私は「如是我聞」ぐらいいしか出てこないですが、そうしたら、それで気がついたというんです。何が自分をうなさしめているのか、その正体が掴めない。理屈ではわかっているのですが、事実としてその正体にたどり着けなかったわけです。しかし「今はさてあらん」とおっしゃられて、汗が出て熱が引いていった。そして起き上がって来られたと書いてあるわけです。

その後、「さて、臥して四日と申すあか月、今はさてあらんとは申す也と仰せられて、やがて汗垂りて、よくならせ給いて候いし也」と。「やがて」というのは、この時代では「即」ということです。「しばらく経って」ではありません。「そうであつたのか」とおっしゃって、即、汗がバアと流れて熱が引いて、いつもの親鸞聖人に立ち

返っていかれたと、このようにお手紙に書いてあるわけです。

(五)

そうしますと、四十二歳の時も大変ですけれども、特に大変なのはこの五十九歳の時ですね。身動きを取れない親鸞聖人がおられるわけです。二十九歳の時に法然上人と出遇われて、生きる道を見出され、それから三十年経っているわけです。そしてこの頃には、ある程度『教行信証』も書いておられるわけです。その親鸞聖人が行き詰まっておられる。現実に行き詰まっておられるわけです。そうしますと、そういう迷いが『教行信証』にも反映されているわけでしょう。そういう非常に大きな意味を持っているのが四十二歳、それから特に五十九歳の時の状況です。四日間、身動きが取れなくなって、「うんうん」と唸って、熱を出して頭痛がする。なぜそうなっているのか。そんなこと言わずに、「大変な状況なのだから、ちょっと手助けにでも行ったらどうだ」と。今日的には「ボラントイアに行ったらどうだ」「何を寝とるんだ」と思うんではないでしょうか。

ところが親鸞聖人は出来ないわけです。なぜ出来ないのかということ、私なりに慮らせていただくわけですが、一言で申し上げるならば、それは本願念仏に一度出遇っておられるからだと言わざるを得ないと思うんです。本願とか念仏というのは一体何かと言えば、「依りどころ」でありましょう。いろんなことをしながら生きている人生全体の依りどころです。宗教の真理というのは、それが救いなんです、逆に言えば、それが失われる時に自分が

生きる屍のごとくならざるを得ない。そういう問題を抱えているのが、宗教に生きる者ではないでしょうか。

その問題に徹底して取り組んでいったのが親鸞だろうと思います。それは、「教えなくてはならん」という立場に立つ人は取れない立場です。「法然上人の教えをいただく」という立場の親鸞だったから、その問題を自らに徹底して解明していけたんだろうと思います。そういう意味で、なぜ親鸞は行き詰まったのかということを一言で申し上げれば、救われるべき本願念仏に出遇っておられたからだ。逆説的ですけどね。

さらに申し上げさせていただくならば、これも本当はおかしい話なんです。なぜなら、本願念仏というのは「この現実を生きる人々の上に救いを開く真実」だからです。山で修行している人の救われる法ではないわけです。法然上人がなぜ浄土宗を開かれたのかと言えば、それは凡夫の救いを明らかにするためです。そのように、法然上人自身もはっきりとおっしゃっています。凡夫の救いを開く真実だと。凡夫というのは、五濁悪世の現実を生きる者です。いろんな出来事が次から次へと起きてくる、その現実を生きるのが凡夫です。自らの思いを持って余しながら生きているのが凡夫です。もう本当に朝から晩までちょっとしたことでも悩む、それが凡夫でしょう。時代状況的にも、明日何が起こるか分からない。そういう中で、凡夫の上に生きていく道を開くのが念仏なんだと、このように法然上人はおっしゃっています。

そうしますと、道理から言えば、むしろそういう状況であればこそ、それにおいて生きることが開かれていかなければおかしいわけです。念仏に出遇って良かったと。本願によって五濁悪世、飢饉の現実の中を「南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏」と念仏を称えながら生きていくというあり方が、道理としては開かれていかななくてはなら



ない。ところが、そうになっていかないうところに、こちらの問題があるわけです。その問題を、親鸞聖人は「人の執心、自力の心は、よくよく思慮あるべし」という言葉で押さえています。凡夫の救いを聞くのは本願念仏ですが、そのことを受け止めさせないものを「人の執心」と言います。「人の執心、自力の心」をよくよく考えなければなりません。これが本願を受け止めさせない、本願を見失わせていく。親鸞聖人をうなさせていた正体です。

「人の執心、自力の心」を私は二つに了解します。いろんな出来事が起こり、その出来事に執られる、これが「執心」です。ここで言えば、飢饉が起これば、その飢饉という一つの現実に執られる。執られると人間の心は善悪ですから、その状況を何とかしようとする立場に自ら身を置く。そういう構造になってくるのではないでしょうか。ですから「執心」というのは、出来事に執られる、事柄に執られるということです。そして、何とかしようとする、それが「自力」です。何とかしようとして、自らの思いに立ってしまうことによって、そういう状況を生きたる衆生を救おうとする本願を見失っていく。私たちは五濁悪世の現実を生きているわけですが、一つの事柄に執られると、そのことを何とかしようとする思いが強くなっていき、そのことにおいて、衆生を救おうとする宗教の真実を見失います。そういうことが、この時の親鸞の上に起こっていたと申し上げてよろしいのではないのでしょうか。悪い善いではなくて、そうなるんですね。そういう中で、親鸞聖人は『教行信証』を書いておられるわけです。『教行信証』『化身土巻』の内容は、おそらくこの辺りの体験をもって書いておられるのではないでしょうか。ですから、親鸞聖人ご自身が、そういう問題を抱えながら克服しようとする体験を持っていないのではないのでしょうか。「化身土巻」のお言葉は、それだけに響きを持っています。やはり体験が裏側にない

と響きは持たないです、単なる言葉です。

## (六)

そうすると、私はこの寛喜と建保の事柄が背景となつて、『末燈鈔』のお手紙が書かれているんだろうと思ひます。これは八十八歳ですから、ある程度そういうことをしのいでこられて、そして「人の執心」「自力の心」が自らの身に明らかとなつた。このようにいただくわけであります。もう少し読ませていただいて、最後に、このことをどういただいでいくのかという、私なりの了解を申し上げます。いま一度冒頭を読ませていただきま

す。

「なによりも、ごぞごとし、老少男女おおくのひとびとに挨いて候うらんことこそ、あわれにそうらえ。ただし、生死無常のことわり、くわしく如来のときおかせおわしましてそうろうえは、おどろきおぼしめすべからずそうろう。まず、善信が身には、臨終の善悪をばもうさず、信心決定のひとは、うたがいなければ、正定聚に住することにて候うなり」。ここでは、最初に申しましたように、その出来事は悲しいことだと、まずおっしゃっています。そして続いて、そのことを「驚くな」と言われる時に、単に親鸞が自分を立場におっしゃっているわけではないんです。一つの教理としておっしゃっているわけではない。「念仏者がこんな現実に驚くとは何事だ」「何事が起こつてきても、そのことを受け止めていくのが念仏者ではないか」、そういうにははおっしゃっていない。

大事なのは、「ただし、生死無常のことわり、くわしく如来のときおかせおわせましてそうろううえは、おどろきおぼしめすべからずそうろう」です。如来の教説を親鸞聖人はただいておられるわけです。ですから、容易に克服できない現実を簡単に克服していく人には、念仏なんていらなないです。如来の仰せに照らされて、おっしゃっているわけです。親鸞聖人自身を立場におっしゃっているわけではない。自身を立場にしたら、やはり言えないでしょう。「驚くな」ということは、何を傲慢なことを言っているんだと、非人間的な言葉になっていきます。如来の仰せに照らされながら、ある意味で、ようやくにしておっしゃっているわけでしょう。

「生死無常のことわり、くわしく如来のときおかせおわしましてそうろううえは」とは、どういうことかということがあります。これは教えられていることですが、「生死無常」と「諸行無常」とは違う、と。親鸞聖人がここでおっしゃっている「無常」は、「諸行無常」ではない。「諸行無常」というのは、人や自然が移ろいゆくという無常です。それに対して「生死無常」というのは、すさまじい現実です。「火宅無常」と言われるような無常です。ですから如来は、我々が生きているこの社会、現実には「生死無常」なのだとおっしゃっています。すさまじい様々な出来事が起こり、飢饉が起こり、戦が起こり、そして様々な出来事が次から次へと引き起こされてくる。それが我々が生きている現実なのだ。そのことを如来が詳しく説いておられるわけです。

『大無量寿経』に「三毒五悪段」という一段がございます。いかにも毒々しい名前ですが、「三毒」というのは、「貪」「瞋」「痴」の煩惱です。その煩惱を元にして、五つの悪が引き起こされてくる世の中、私どもが生きている現実の姿を、『大無量寿経』では、全体の四分の一を使って説いています。これは大変な量ですよ。それだけの

量を使って人間の現実が説かれているということは、まずないんじゃないでしょうか。『大無量寿経』は上下二巻に分かれています。そのことが説かれております下巻で言えば下巻の半分です。その半分で、如来が衆生の現実の姿をずっと説いておられるわけです。親鸞聖人は、「三毒五悪段」で如来が説いてくださる「衆生が生きている世界はこういう世界なんだ」ということをもって、「驚くな」とおっしゃっておられるわけです。それはどういうことかと言いますと、三毒五悪の現実は無責任になることではありません。むしろ一つの事柄に執られることによって、身動きが取れなくなっていく私どものあり方から解放してください、と言っているのではないのでしょうか。

私たちが生きているこの現実には、全体が三毒五悪なんです。そういう現実を生きている我らを救おうとしておるのは、如来の本願なんだけれども、そのことにすら執られていく、そう申し上げていいんじゃないでしょうか。どうしても一つの事柄が起こってきますと、それに執られ、周りが見えなくなりません。全体がそういう現実ですから、もちろん個別の事柄は個別の事柄として、対応していかなければならないということもあります。しかしそれだけではないんです。

何年前の文章です。敬老の日に、テレビには元気でボランティアとかいろんなことで、ニコニコしている老人の姿が出るけれども、その敬老の日に何人の人が自殺しているかということ、老人の方が書いておられました。「老人のほとんどは、やはり生きることにあえいでおるんだ」と。それを読みますと、読む私自身その記事に執られてしまいます。そして、何とかしようというところに立ってしまう為に、自分自身が身動きがとれなくなってしまう。そうではなくて、「この私たちが生きている現実そのものが生死無常なんだ」という形で、一つのこと

に執られていくあり方から解放たれて、それ全体を救おうとしている如来の本願に立つ。そういう生活を開こうとなさっておられるのではないのでしょうか。それが「ただし、生死無常のことわり、くわしく如来のときおかせおわしましてそろろうえは、おどろきおぼしめすべからずそろろう」の表す意味であると申し上げていいのではないのでしょうか。

そこに立って何をするかは、またそれぞれです。「老病死」「生死無常」の現実を生きている私どもを救おうとするのが如来なんですから、その上で個別的な対応を、それぞれの縁でやっていくわけでしょう。そういうことが開かれていかないと、宗教の真実に生きるといふ道は閉ざされてまいります。個別のことだけに対応する宗教になつてまいります。「老病死」を生きている私全体が救われようとする、そういう救いを開いていく真実が、「南無阿彌陀仏」でしょう。私たちが生きている現実全体に眼を開かせるわけでしょう。そういう現実を生きる私の全体を救おうとする本願に、立ち返らせようとする。

ですから、この親鸞聖人のお手紙は、この後自然に信心の問題に展開していくことが出来たのではないのでしょうか。執られる心が真実を見失わせていく。執られる心から解放されていく時に、現実を生きている我らを救おうとする真実に立ち返ることが出来る。立ち返ったところから、人間としていろんな問題に、状況や縁の中でそれぞれに対応していくことが出来る。そういうことを、このお手紙は開こうとしていると言っているのではないのでしょうか。

## (七)

それと最後に、もう一言申し上げさせていただきます。親鸞聖人はこれを決して安閑として書いておられるわけではありません。先ほど申し上げましたが、そのことを示しておりますのが、このお手紙の最後に書かれている「善信」というお名前です。親鸞聖人のお手紙は四十三通ありますが、「善信」という名前で書いておられるのはたった二通です。あとは「親鸞」「釈親鸞」「愚禿親鸞」です。ところがこのお手紙は「善信」で書いておられる。もう一通、「善信」で書いておられるのが、最晩年の、ある意味で老いの悲しさを記しておられるお手紙です。それも、ただたどしく仮名で「ぜんしん」と書いておられる。

私は、この「善信」という名前で書いておられるのは、親鸞が非常に危機に瀕しておられる時だろうと捉えておられます。危機に瀕しておられる時に、励ましを受けておられる。「善く信ぜよ」と。私は親鸞聖人が、動乱の中を生きていかれた聖徳太子から、「善く信ぜよ」「本願を信ぜよ」という呼びかけを受けられながら、このお手紙を書いておられるのではないかと思うのです。これはご存知かと思いますが、親鸞聖人が十九歳の時、「善信善信真菩薩」と、聖徳太子から夢告をいただかれたと伝えられています。「善く信ぜよ、善く信ぜよ、真の菩薩よ(を)」と。ですから、十九歳の時から「善信」という名前を非常に大事にして、聖徳太子からの呼びかけを受けながら歩まれた。もう一つ言えば、呼びかけを受けないと歩めない人だったのではないのでしょうか。親鸞聖人は聖徳太子を、念

仏者としての自分を生み出す「父」であり「母」であるとおっしゃっていますから、聖徳太子がいないと子供としての念仏者の自分は生まれないと。それくらいの名前が、聖徳太子から呼びかけられる「善信」だろうと思います。

こういう問題というのは、結論は出ないと思います。ただとどしく現実を生きている中で、念仏者としてどう生きればいいのかと、教えとの対話あるいは導いてくださる方との交わりの中で、切り開いていく、明らかにしていく事柄でしょう。家庭でもいろんな問題があります。いろんな問題を抱えながら生きていくわけです。その時、「本願だから苦しくない」というのではないのでしょうか。そういう中で、何とかしようとするわけであって、そういう中で、気づかされながら歩いて行くのが、私は念仏者の姿だろうと思います。そういう意味で、「大震災を縁に学んでいること」という進行形にさせていただきました。ご静聴いただきました、ありがとうございます。

(二〇一二年一月二六日)